

第5回フィールドワーク、「秋畑 進 日記」 (写真記録は雲南懇話会 HP の「写真館」に収納)

1. 期 間； 2008 年 11 月 2 日～15 日
2. 参加者

【日本側】

団長：亀田義憲、 副団長：前田栄三、コーディネーター：秋畑 進（記）、岡 邦俊、齋喜國雄、 神山 巍、 松島岳生

【雲南大学側】

尹(Yin)紹亭 民族研究院教授

事務局：曹(Cao)津永、 日本語通訳：宋(Song)旭艷、 英語通訳：張(Zhang)海元) 丘北県観光局長：羅(Luo)樹昆、 バス運転手：蔡(Cai)興貨

11 月 2 日（土）成田→北京→昆明

6 時 41 分、スカイライナー始発で成田空港着。第 1 ターミナル 4 階の端にある QL ライナーで、雲南で使う携帯電話を借りる。

7 時 35 分、6 人チェックインを済ませたところでセキュリティ及び出国手続きを終え、お土産として煙草（5 カート）、羊羹（3 箱）を買っておく。

8 時 30 分、47 番ゲートから搭乗する。機材は B757、ほぼ満席だった。

9 時 8 分、離陸。巡航高度に雲が漂っていてベルトサインがついたままだった。30 分後、飲み物サービスが始まる。中国語で客室乗務員にビールを頼んでみると、燕京ビールが出た。お摘みはなかった。食事はビーフとチキンの選択。食後、入国カードが配布される。時計を中国時間に合わせておく。

11 時、左手に山東半島の先端が見える。河口の両側を埋め立てていた。到着前、ジャスミン茶のサービスあり。空から見た天津空港は北京空港に似ていた。

12 時 7 分、北京空港に着陸。満員のシャトルに乗り、ターミナル 3C で下りる。38 番で荷物を取り税関は素通りする。両替所があったので、取りあえず 1 万円を中国元に替えておく。手数料は一律 60 元だった。

国内線の階へエスカレーターで行き、J3 に行き、皆のパスポートを集めて一括してチェックイン。セキュリティを通過し、CA4170 便のゲートを確認してから解散する。我々の乗る飛行機は遅れて着いたが、30 分で搭乗開始、10 分後、ドアを閉めてゲートを離れ、18 分移動して離陸する。機材はエアバス 319、ワインはないがビールはあった。瀾滄江ビールを飲みながら食べる。眼下に見える地形は断層があったり、幼年期の谷が見え、稜線に道路が続いていた。(写真館、「北京→昆明」) やがて雲に隠れてしまう。

18 時 13 分、気温 14℃の昆明に着陸。雨が降っていた。荷物が出てくるまで待つ。出口の先で、ローマ字で書かれた私の名前を掲げた青年を見つけて合図する。

3ヶ月ほどメールでやりとりした曹君に始めて会う。同行する宋さんも迎えに来ており、皆を紹介した後、バスに乗り込む。彼女は雲南師範大学の4年生で保山出身だった。

「戦争中は大変ご迷惑をかけました」

「それは昔のこと、あなたが悪いのではありません」

19時25分、雲南大学の構内にある雲大賓館の奥に着く。カウンターで曹君が手続きをして鍵と朝食券を我々に渡す。716号室に荷物を入れ、30分後、ロビーに集合。バンコク経由で到着していた副団長も現われ、7人揃った。館内のレストランで2人がメニューから料理を7品注文して「この食事代は予算に入っていないから」と言って出ていく。ビールと白酒（焼酎）を飲みながら食べる。

21時過ぎ、終わった頃に再び2人がやって来て、明朝9時に会うことになった。大学のホテルということで期待していなかったが、テレビ、バス付きで問題ない。明日の仕度をして寝る。

11月3日（日）昆明滞在

曇

7時、湯を沸かしコーヒーを飲んでから階下のレストランに行く。朝食券を渡してビュッフェスタイルでお粥と麺、目玉焼きを食べる。食後、団長と校内を歩いてみる。学生食堂の他、回教徒向けの清真食堂があった。学生が樹林の間で黙々と本を読んでいたりと、暗誦していた。トリュフォー監督の映画「華氏451」のシーンを思い出す。この大学は生物学部が古くからあるようで、ギリシャ神殿にある列柱が大学本館の入口にあった。図書館は身分証がないと入れなかった。学内新聞や掲示板を見て帰る。

9時、曹君と宋さんが我々をバスに案内する。バスの横に「雲南大学」と大きく書かれていた。（写真館。「専用バスと団員」）曹君によれば、学生は図書館の良い席を確保するのに朝5時から並んでいると言う。宋さんは、今年の日本語スピーチコンテストで2位だった。1位だと東京1週間の旅ができる。来年3月に再挑戦すると言う。

9時47分、民族博物館の広場に着く。入口手前右手に大きな水牛像、左手には孔雀像が立っていた。月曜日は休館だが、事前の尹教授の計らいで我々を見学させてくれた。

最初は画廊コーナー。当代画家による西域地方とおぼしき風景と人物画を展示販売していた。各民族の衣装展示室に入る。「普米族には美人が多い」と宋さんが言う。西北部国境の独竜族は7,400人しかいない。叢やリス族の猿皮ショールの他、宗教儀式に着的チンポー族の魔除け衣装、虎や龍をあしらった衣服、回族の礼服、そして哈尼族の機織りなどが展示されていた。

楽器コーナーでは苗族の笛、布依族の竹弦琴、藏族の大きなシンバル、麗江・納西族の蛇皮三弦、徳宏州・イ泰族の牛角琴などがガラス越しに見えた。少数民族が笛といった管楽器、三味線といった弦楽器、シンバルや太鼓といった打楽器を持っているということは、オーケストラ編成に必要な楽器を持っていることになる。（写真館。「民族博物館の中庭」）

博物館に関連する図書を集めた部屋に入る。英語の本を探したが、ない。曹君の論文が

載った学術書を見つけた。「すごい」と言ったら、恥かしがる。尹教授編著「民族文化生態村」を買っておく。

次は仮面コーナー。藏族の鹿神（写真、藏族の鹿神）や3つ目をした吉祥天母の面、彝族の豹や猿面などがあつた。広い室内の床に、雲南出身の宦官・鄭和が辿った航路を描いてあり、壁には関連する写真や資料を展示していた。何故ペルシャ湾に入ったのか興味がわく。トンパ文字やお呪い・甲馬^{じやーま}があり、彝族、瑶族^{やお}の脱穀機はイ泰族と同じスタイルだった。

12時10分、博物館を出て「郷村小榭」レストランに行き、食材を選んで料理してもらって食べる。竹虫はあっさりした味で、緑野菜と赤唐辛子の炒めものは余り辛くなかつた。ほかにトウモロコシや豆料理、豆腐の厚揚げ、人参入りスープを賞味する。

13時45分、民族村に行く。（写真館、「民族村」）65歳以上は入場無料、ガイド資格を持つ宋さんも無料だった。思わぬ特典に与り、広大な村内なので10人乗り電動カートを使うことにして、2割引きさせて320元払って乗る。彝族の女性が運転して最初に訪れたのは佤族^わ。黒に赤縞の服を着た女性が恋の歌を歌う。膚は黒いが美形だった。

30分後、蒙古族の大きなパオに入る。奥にフビライ・ハーンの肖像が飾つてあつた。（写真館、「パオ内」）近くに射的場があり、若者が蒙古の弓矢を使つて的をねらつていた。

立派な門を通過して納西族の家に入る。（写真館、「納西族村の門」）通い婚の風習があり女性の地位が高い。祖母の部屋が一番立派だった。土産店の通りでは藍染め用の木「板藍根^{ぼーがいは}」と染め用の樽があり、出来上がった作品を売つていた。「斯美蝴蝶館」に入って蛾と蝶を観る。名前に学名、漢字のほかカタカナが書いてある。蝶の羽根を使つてできた、怒族^{ぬー}衣装を着た女性の作品があつた。

踊り場を囲む席から普米族の踊りを眺める。（写真館、「普米族」）案内板によると彼らは雲南固有の民族で人口33,000人、チベット仏教を信仰している。男性は藏族に似た服装、女性は白族に似ているが、帽子は黒を基調としていた。男女5人ずつ楽器を持って踊る。

次にリス族の男がお呪いをした後、長い梯子を登り先端から降りてくる。最初は出初め式と同じと思つて見ていた。先端で何もしないので芸がないと思つたが、近づくと段がすべて刀で刃が上に向いていた。梯子の前に「危険なので手で触らないこと」と書いてある。

イ泰族の屋敷や仏塔を通り、出口に向かう。大きな池の遠くに西山森林公園の山が見えていた。民族村（出入口）正面にあるガジュマルの大木は模造品だった。

16時、民族村を出発。円を元に替えるため銀行に寄る。建設銀行ではUSドルしか受け付けないので中国銀行に行く。手数料は2.42%徴収された。夕方5時から7時まで街は交通渋滞になる。途中の道で、車と衝突したバイクが横転していた。

17時30分、ホテルに戻り、曹君を部屋に呼んで、これからの交通費と施設入場料を合わせて支払う。残る謝礼金及び曹、張、宋さんの通訳費用は14日に昆明に帰ってから支払うことにして、不足分は別途、参加者から徴収することにした。

18時、夕食に曹君、宋さんを招待し、近道を通つて公園脇の火鍋料理店に行く。歩道の両脇は漢族の学校関係者のアパートが建ち、泥棒対策で窓を鉄格子で覆つていた。下の階

から次々と覆うようになったという。大通りに出て「重慶火鍋」レストランの4階の丸テーブルにつく。2人が注文、酒豪のM氏が思芽の白酒を仕入れてきた。注文したものを次々と鍋に入れて食べる。黒鶏がひときわ大きな皿に盛られ、足の部分を食べてみる。岩海苔を食べているような感触でゼラチンたっぷりだった。

帰りは大学正門を通る。当初、女性通訳2人の予定だったが、宋さんは1人になったことを喜んでいる。日本女性とは違うと思った。

11月4日(火) 昆明→新平→南碱村

小雨のち曇

7時10分、階下で朝食。(写真館、「ホテル朝食」)

8時30分、集合。雨のため交通渋滞で、バスは15分遅れて到着。英語通訳の張氏が乗って来て挨拶する。科学院で尹教授と羅さんが乗ってくる。教授は昨日まで南京で会議に出ていたそう。宋さんが教授の説明を日本語に通訳する。

「昆明は人口380万、その内100万人が外から移住してきている。上海の場合は、殆どが移住者になっている。10年前、畑だったところが工業団地になっており、東15キロに新しい大学町を建設中で、雲南大学の本科生が移動する。滇池の汚染が問題で環境対策を必要としているし、地下鉄を計画している。これから訪問する南碱村のイ泰族は高齢化しつつある。女性が出稼ぎに行ってしまう、男性は未婚者が多くなっている」

右手の斗南鎮は、花売り市場が有名で海外にも輸出していた。途中、給油する。

石寨山遺跡の近くを通ったところで、再び教授から解説を受ける。「この一帯は未だ遺跡が残っている。ここから発掘された青銅鼓や滇王の金印は昆明の雲南省博物館に保管されている」。滇池がいつとき見えた。やがて玉溪(Yuxi)市に入った。

10時55分、トイレ休憩。雨が少し降っていた。小母さんが軽食をバケツに入れて売っている。20分後、川を渡って峨山を通過。長いトンネルを過ぎ、照葉樹林の山の間をぬって走る。ずっと人の気配がなかったが、やがて畑と家が現われる。大開門で料金所を通過。右手にサトウキビ工場があった。植生が変わり竹とバナナが多くなり、ビニール栽培をしていた。紅河の支流、尼川に沿って走る。

12時15分、新平(Xinping)の料金所を通る。教授曰く「この町はイ泰族と彝族の町。県知事は交代して就く」。高度1,480m、中心の通りは柳並木だった。新平賓館で李樹華、新平県宣伝部長の出迎えを受け食事を一緒にする。彼女は彝族だった。哈尼族の女性が給仕する。13品の内2品が狗料理だった。(写真館、「狗料理など」) 身体が温まるという。残った竹虫と牛の乾し肉を箱に入れてSさんが持って帰る。帰りがけに新平案内の厚い本をいただく。お礼に、曹君は私が預けた煙草から2箱、私は缶入りドロップとコンペイトウを李樹華部長に渡す。

13時40分、出発。松、トウモロコシ、バナナが見える。1,600mまで登り、降る。舗装道路を走っていくと堰止め湖が現われた。岩壁の下、川に沿って走る。サトウキビ工場を通過して5分、南碱村^{じえん}の門の入口で何人か我々を待っていた。(写真館、「南碱村入口」)

14時45分、白紹福村長、前村長、イ泰族の衣装を着た女性たちに迎えられ、縄跳びのように赤い紐で囲われた中を2回またぐ。悪霊を払う儀式だった。(写真館、「悪魔払い儀式」)健康と厄除けの印しに赤い糸を手首に巻いてもらい、終りに竹製の小さなカップで地酒を飲む。80歳になる最長老のお祖母さんもいた。博士研究生の張海氏は、ここに足掛け2年調査に来ており、村民達から慕われていた。村の中央に案内され、サトウキビをいただく。今が収穫期で甘くてジューシーだった。神木は樹齢200年位だろうか。二股になったところに生贄の骨が置いてあった。近くに神の石椅子と神の足跡がついた石がある。(写真館、「神の足跡と椅子」)

一段落して神木の下で村長、前村長と質疑応答が行なわれる。(写真館、「質疑応答」)
「迎えてくれた彼女達の衣装は行事用で、普段は着ていない。この地には700年前に移住してきたと伝えられている。現在56家族、276人が住む。無文字社会で村長は3年に一回、選挙で選ばれる。川には80種類の魚がいたが、上流が汚染され、人口が増えたので30種類に減っている。イ泰族は焼畑農業をやっていないが、彝族はやっている」という。

「イ泰族は3つの支族に分かれ、ダイ・カーは別名、花腰イ泰族、南碱村に居り、44の集落で7,000人いる(写真館、「花腰イ泰族」)。ダイ・ヤーの女性は、竹製のお盆を頭にかぶり、ダイ・サーの女性はベトナム式の笠をかぶる。80年前まで、お互いに結婚することはなかったが、今では一緒になることもある。宗教はアニミズムだった。葬式では太鼓や笛が吹かれ、村長が取り仕切るが、他の行事は6人の女性が取り仕切る。織物や竹細工を作っているが、歌の伝承が難しいという。生徒は5キロ程離れた村の学校に寄宿している」という。村には作業用の車とオートバイしかなかった。

2002年設立の文化伝習館に行く。(写真館、「文化伝習館」) 広場の奥にあり、脱穀機、^{はた}機織機や生活道具、竹製鰻捕り器などのほか、階段の上に牛皮の大太鼓があった。白紹福村長の写真と共に、文化伝習館を更に充実させ、村の発展に寄与したい旨のメッセージが漢語と英語で書かれていた。

16時、文化生態村の南碱村を歩く。村中の道がコンクリと滑り止めの石を散りばめて舗装されていた。教授が2002年に著した報告書によると、道路は援助金でまかない、家は自分達で建てた。土壁の家は僅かしか残っていない。青筋アゲハが飛び、^{へちま}糸瓜や柿の実がなっていた。家の前に蜂の巣を吊るしている。(写真館、「蜂の巣」) 穴が多いので鬼がどこから入ったらよいのかわからなくなるからだという。青年がバイクにゴーヤを一杯乗せていた。これから町に行って1キロ2円で売るといふ。小母さんが草葉を籠に入れて担いで帰ってきた。豚や水牛の餌にする。

3階建ての家にお邪魔する。主人は譚菜富、51歳。18で結婚、孫がいる。3階では男がミシンを使っていた。最後に階下に降りていくと、若者達が集まっているところに座られ、地酒を飲まされる。他の村から独身の男が遊びにきていた。足がふらつかない内に別れ、一回りしたところで畑の方へ足を運ぶ。アヒルが水田にいた。小母さんは空の大きな籠を背負って畑に向かう。大型サボテンを見つける。パパイヤが実をつけ、ゴーヤとサト

ウキビ畑があった。(写真館、「ゴーヤとサトウキビ」)

集会場に向かう。アヒルと鶏の家族と一緒に幼子がいた。同じような大きさの生き物が動いていて絵本に出てくる世界を見る。しばらく座って同じ目線で眺める。映画のように動物の声は聴こえてこなかった。

17時30分、運転手の葵が池で釣ってきた鯉のスープや頭入り家鴨料理、豚の野菜炒めなどを食べる。アルコール48度の白酒「楊井肥酒」を飲みながらなので消毒されている。食後、バスまで行って荷物を運び出し、各家に分散して泊まる。私は団長と白眞良家に世話になる。団長は応接室の隣の部屋、私は屋外からの個室だった。しばらくテレビを観、四方山話をして寝る。部屋は明らかに娘のもので人気俳優のポスターを壁に飾っていた。ベッドの上にシュラフカバーを置いて中に入り、タオルを枕にかけて寝る。

11月5日(水) 南碱村→新平

雨のち曇

3時、尿意で目を覚ます。雨が降っていたのでレインウェアを着て傘を差し、懐中電灯をつけながら、共同便所に行く。深夜、雨の音だけ聴こえていた。帰りに神木に寄って、氣功法の1つ、樹功をやってみる。木と同じように直立して木から気をもらい、五感を研ぎ澄まして語る。夜、雨の中の樹木は光合成も、根から水分を汲み上げることもせず、就眠状態だった。

部屋に戻って横になりながら、宇宙樹について考える。樹木は水を、その身に貯え、太陽エネルギーを地球の生態系に引き入れ、酸素を生み出し、雲や木陰を作って和ませ、樹液や果実で他の生物を養う。姿全体が宇宙的ではないか。あの神木は、この村を守る木として崇められているのだろう。

6時、薄暗い中、夫人の白鋭さんが作業をしていた。雨もやみ、明るくなったところで外に行って洗面しようとしたら、屋敷の中に洗面所があった。歯を磨いて顔を洗う。奥さんは野菜の下ごしらえをしていた。「ガンネーリー(オハヨウ)」と挨拶したが、次が続かない。「ムリムリ」がハワイのアローハと同じくお礼の意味や何でも使えたので言う。Kさんも起きていた。

7時過ぎ、共同便所に行く。村の男が2人やってきた。慣れれば便利なところだ。やがて水が勢い良く流し去ってくれた(写真館、「共同便所」)。

宿泊先に戻り、キッチンにある椅子に座ってお茶を飲みながら白さんと話す。娘は18歳、息子は11歳、2人とも新平に寄宿している。尹紹亭教授編著の報告書の中の南碱村の報告部分は写真が多いので夫婦に見せると、興味深そうに見ていた。そこへ教授が現われた。

「8年前は道も悪くてここに来るのは大変だった。建物は住民の希望に沿って建てようとしたが、昆明理科大学の建築家のスタッフが安全性を考慮して、今の家を設計した。この村が成功したので、他から盛んに申し入れがきている」とのこと。

8時30分、集会所でドンブリに麺とツユと具を入れて食べる。タイの麺ツユと変わらない。食後、宿泊先に戻って大きな荷物をバスに運んでいくと、村長が手伝ってくれた。

9時20分、村長の案内で、聖なる山に登っていく。鉄条網を越え、森林の中を掻き分けて野生稲が生えているところに行く。樹間にある細い草がそうだった。雨で稲穂は落ちている。ここでは日があたらない。稲作文明の発祥地と思われる地域で、時空を越えて野生稲と対面する。(写真館.「野生稲」)

そこから更に進んで聖樹の下に立つ。旧暦6月23日にここで儀式を行なうという。村人は、この森に家毎に聖樹を持っていた。マンゴーの古木に等間隔に傷をつけていた。葉の生育を減らし、実を多くつけるためだという(写真館.「マンゴーの木」)。

10時、頂上の聖域には行かずに、ぬかるんだ道を降りる。途中、K氏と宋さんが足を滑らして、お尻を汚してしまう。薄紫色の花・モーヤーサイクンロァンは催眠性があるという。トリカブトの花を思い出す。林道に出て村に戻り、更に川に沿って歩く。竹網で魚を捕るように工夫していたり、Y味(Yawei)河をせき止めていた。やがて濁流の大河、漠沙江(元江)に合流するところに出る。(写真館.「元江に合流」)

教授に誘われてイ泰族の祭礼場所に登っていく。聖樹の下に空き瓶が残り、掘っ立て小屋が建っていた。広場からは漠沙江が良く見えた。ここで舞が行なわれるという。

更に歩いて河べりに行き村に戻る。途中、生簀で釣りをしている人がいた。ミミズを餌にして竹棹をたらす。1匹鮒を釣ったが放す。

豚小屋は畦水の脇にあり、糞が水田に流れていくようになっていた。(写真館.「豚小屋」)アヒルには水田の虫を食べさせ、ムダがない。森を大事にし、灌漑設備を整え生態系の維持、生産を図ったエコロジカルなシステムが、この村にある。長年にわたる村の風土を、教授が文化生態村として確立していた。集会所に戻ると、前村長が赤子を背負いながら手伝いに来ていた。村長は生簀から2匹の鮰を持ってきた。

12時過ぎ、Oさんがグループ共有のレンタル携帯で東京の弁護士事務所に連絡してみる。はっきりした声が聴こえていたという。こんな僻地でも、近くの山に通信塔があるので使えた。豆入りスープに鮰、鶏、野菜、それにアヒルのゆで卵を食べる。卵は縦に四つ切りにしてあり、殻がついていて塩味がした(写真館.「鮰、家鴨の卵など」)。

張氏と話す。

「この村に住む1人の男のドキュメンタリーを作って山形国際ドキュメンタリー映画祭に応募したが、入賞できなかった。今、台湾の基金から援助を受けて生態調査している。」

「女性は朝から晩まで良く働いている」という。また、「私が調べた限りだが少数民族という、行事用の衣装や冠婚葬祭などが注目されるが、日常の生活振りも知りたい」と言う。

食後、出発の時刻まで散歩する。昨日会った竹細工の爺さんの家に行ってみる。爺さんは竹を細かく割る刃物を研いでいた。門の中に案内されて作品を見せる。奥さんは刺繍をしていた。「ムリムリ」と言いながら辞去する。十字路でも小母さん達がしゃがみ込み、刺繍をしながらおしゃべりしていた。

14時10分、出発。バスに村の青年男女各1人が同乗していた。

15時20分、新平で1番のホテル鑫源酒店(XinYuan Hotel)に着く。(写真館.「鑫源酒店」)

部屋に入り、早速、シャワーを浴びようとしたが出ない。バスタブを使って入浴していたら、団員から問い合わせの電話がかかる。飲用のお湯を出すのに苦労しているという。

18 時、ロビーに集まり、別館のレストランに行く。カシューナッツを摘みながらバドワイザービールを飲む。今夜の白酒はアルコール 50 度の玉林泉酒だった。彝族は標高の高いところに住みソバを栽培している。蕎麦ケーキが出る（写真館、「蕎麦ケーキ」）。グリーンピース、カボチャ料理に 2 種類のスープと盛り沢山だった。

19 時 30 分、食事を終えてホテルに戻り、歌舞ショーを曹君に頼む。15 分後、歩いて行ったところは広場。市民が輪になって CD 音楽に合わせて、バンジョーのような楽器をもって踊っていた（写真館、「広場の踊り」）。しばし輪の中に入って踊り、別の道を歩いて帰る。体育館、記念像、広場、何でも大きかった。

11 月 6 日（木）新平→建水→^{カーファンツェン}卡房鎮 気温 17℃、湿度 80% 曇のち雨のち曇

7 時 15 分、階下へ荷物を運んで入室用カードを返し、ビュッフェスタイルの朝食をとる。教授の知り合いだろうか、女性が教授の著作を持ってきてサインをしてもらっていた。

8 時 20 分、出発。教授の話をお宋さんが通訳。今日も雨で、昨日は雲南省で土砂災害により 10 人以上死亡したそうだ。彼女の言い方で、日本語が少しおかしい時に指摘すると、直ぐメモしていた。日本人と変わらない話し方なので感じが良い。

「若いって羨ましい」

「皆さんのように知識が豊かなのは羨ましい」

9 時、大開門で高速に入り、玉溪方面に戻る。研和鎮 IC で高速道路を出て、31 キロ先の通海(Tong Hai)に向かう。高度 1,965m まで上がり、峠でトイレ休憩をとる。練炭が 3 つ入る七輪があった。（写真館、「七輪」）

峠を降りていくと、地名に興蒙蒙古族と書いてあったが、モスクを見つけて納得する。一帯は野菜畑が多く、トラックに白菜やキャベツを満載していた。

通海から料金所を通過して（高速に入り）建水に向かう。山や森が続き、多霧地帯を通過する。下りに入ると、車のブレーキが効かなくなった場合の避難口があり、何段もの砂利列でスピードを殺せるようにしていた。ミカンと棚田が増えてきた。

11 時 40 分、建水市に入る。バスケットボールのスーパースター姚明(YaoMing)の看板が電柱にずらっと並んでいた。ここは漢族の町で、天安門より 27 年古い楼閣が中心にあった（写真館、「楼閣」）。街路樹のある臨安路を走り、道教のお寺「第一山」に入って駐車する。境内にある共産党員が利用する国営レストランで昼食をとる。お姉さんが注文をとり、若手を招集して料理と接待を指示していた。スコールのような雨が降り出す。

待つこと 20 分、建水豆腐、トウモロコシ、カボチャ、葱、白菜、挽肉を使った料理が続々と出てくる。スープには薄荷と卵が入っていた。窓から碑文が見えた。食後、寺の庇の中に建つ碑文を視る。一つは功德碑と彫られた献金者のリスト、一つは清朝代のもので諸山僧衆と本山徒衆の名前や仏教という字が彫られていた。

13時30分、雨もやみ、臨安路を歩いて楼閣に向かう。孔子を祀る公園があり、入場料50円必要だった。「太和元気」と書いた門の先に建つ孔子像を撮っておく。1285年建立後、50回修理と拡張を続け、孔子の生誕地に次いで有名になっている。

ここの焼き物は中国の4大陶器の一つということなので、記念に建水焼きで「洗心」と書いた飲み器を買う。城門「朝陽楼」まで歩き、階段を登って街並みを眺める。大きな鐘楼の脇で薄汚い身なりの男達がトランプに興じている。楼閣下の通路では、手相、ポルノ写真、野菜売りやトランプをしていた。団長は虫眼鏡を2元で買って来た。一緒だったOさんは靴を買いに行ったまま消えてしまう。団長には楼閣に行くと言っていたそうだが、一向に現われない。

14時48分、食事したレストランで発見。山屋らしく、元の場所に戻って待っていた。予定の40分遅れで出発。教授の提案に基づき、再発防止のため、団員を3つに分けて宋さん、張氏、曹君が監視役を担当することになる。教授は警察に届けることも考えていた。

15時30分、ガソリンスタンドでトイレ休憩。高度1,300m台から300m上り、料金所を通過。長さ3,430mのトンネルを抜けると錫の都、個旧市だった。

16時40分、個旧市中心部に入る。(写真館。「個旧市」) 10分後、4つ星の「10番ゲスト」ホテルに寄り、休憩。2人の男性が現われ、1人がバスに乗って自己紹介する。紅河州苗族会長の陶さん、62歳。個旧市は人口14万、錫工場に勤務している人は1万5千人、110年の歴史があり、錫の埋蔵量は100年分あるという。

バスやトラックが行きかう未舗装の道を走る。重量のある車が頻繁に通るせいか、穴ぼこだらけで良く揺れる。高度2,120mまで上がってから高原状のところを進む。漢方薬、三七の栽培が目につく。1m近くの高さに黒い網が一面に張られていた。やがて半月と星が見えてくる。

19時25分、バスでの通行が難しくなり、4WDを調達することになった。しかしバスの蔡運転手が運転続行を決める。4WD1台がやっと通行できるような山道を中型バスが行く。運転歴25年の彼も初めての経験という。

21時10分、卡房鎮の苗族村に着く。無事着いたので蔡に拍手する。まさに辛苦了(ご苦労様)だった。錫鉱山経営で大もうけをした楊(Yang)維興氏の家に泊まる。(写真館。「楊維興邸」) 3階建ての家は250万元を投じて建築したとかで、吹き抜けの応接室では大型の液晶TVが映っていた。食堂に行き、既に冷えてしまった料理を食べる。白酒「地道」を飲む。苗族衣装を着た4人の若い女性が歓迎の挨拶に来た。曹君に言われるまま、団長の隣りの部屋に寝る。一部屋2人、3人のところもあった。

11月7日(金) 卡房鎮→蒙自

13°C 曇

3時、外に出てトイレに行く。豪勢な家にしては、何故かお粗末だった。星が出ており、鶏の鳴き声が既に聞こえた。明るくなって外に出ると幻想的な風景だった。(写真館。「苗族村の朝」)

7時、朝食は、スープに麺と刻み葱と惣菜を入れて食べる。麺は「清水桂面」製のものを使っていた。教授は食べるのが早い。

7時30分、パジェロに乗っていくと学校に行く生徒達に会う。路藤村の集会場で降りる。

8時、冷葬儀（仮葬儀）が執り行われる。村長らしき男の話に宋さんが通訳する。冷葬儀は成人が亡くなった時のもので、5年前、病死した男性の葬儀だった。遺族が葬式費用を工面するのに5年かかったようだ。

8時10分、実家に行く。ここで前夜、飲み歌い踊っており、若い男達は酒臭かった。故人の苗族上着を竹製盆にかけて魂が入っているもの（霊盆）を実家から出してきた。男の葬式では姉妹が、女の葬式では兄弟が担当する。

葦笙の楽器を吹く男の後ろに娘が枯れ枝の束を持ち、親族と思われる男が霊盆を持って進む。（写真館、「霊盆」）関係者が続いて歩いていくと爆竹が鳴った。昔は竹を燃やして鳴らしていたという。広場に出ると大きく長方形に歩く。生贄になる牛も続いて輪になって、男は9回、女は7回周るといふ。長い竹棹の上に神と人を結ぶ鳥が飾ってあった。

8時30分、苗族服を着た女性たちだけが集まり、亡き人へのお別れの儀式をする。竹棹と藁の屋根で出来た安置所に霊盆を置いて、皆、声を出して泣く。泣くことによって魂を天国へ導く風習がここにもあるようだ。娘は空涙ではなかった。（写真館、「別れの儀式」）

霊盆は蔓で牛の口まで繋がれていた。牛は身体を震わせている。近くで爆竹を鳴らし恐怖感を煽っていた。（写真館、「生贄の牛」）

長靴を履いた長老が霊盆の中に食事とお神酒を捧げ、お呪いを唱える。脇にある太い線香の束から煙が出ていた。

2人の男が玄能で牛の眉間に打ちおろす。1回目が外れ2回目で倒れた。男達が縄で牛の足を縛り、首元を切って吹き出した血をバケツに溜める。教授曰く「チノ一族では牛の足と首を切り、血は固まらせて食べる」といふ。良く見ると牛はまだ動いていた。

儀式があると屋台はつきもの。小間物を売る露店やバーベキューをやっていた。

9時20分、集会場の広場に舞台は移り、長老2人が葦笙を吹きながら足をあげてゆっくと踊る。鶏闘舞というが優雅なものだった。（写真館、「鶏闘舞」）

次に縦笛を別の男が吹く。教授が何やら村長に話すと、昨晚、挨拶に来た4人の女性が現われ、若者バンドの音楽に合わせて踊り出す。（写真館、「葬式後の踊り」）竹盆を持ったり、横笛を弾く仕草をしていた。我々の訪問を記念した集合写真を撮って別れる。

分岐点まで歩いてバスを待つ。その間、踊り子4人と話す。衣装は1年かけて織ったもので緑は田、赤は生贄の血の色、山は三角形の赤（土の色）、星は×印というように自然の景色をデザインしている。（写真館、「衣装デザイン」）200円で売っていた。年齢は17～18歳。4人の内、3人が既婚者、1人は未婚だった。張氏が「誰が未婚でしょう？」と聞くので、普通の顔をした娘をあげたら「どうして」と聞く。「男が選ぶのは美しい方」と言ふと、「流石」と言われる。1人は既に子どもがいた。

10時50分、バス到着。ルートを検討した結果、別の道をとることになった。牧牛の列に

出会う。盆地の中に 2 つの岩山が突き出た風景に見とれる。その内、バスの底やバンパーを擦ってしまうので降りて歩く。今日は鍬を用意してあり、折々曹君が土石を掘って通れるようにする。(写真館.「道路工事」)

11 時 45 分、乗車。高度 2,100m 台をゆっくり走る。ゲートを通ると、舗装道路になる。錫採集場が現われ、錫を沈殿させる池が続く。(写真館.「錫採集場」)

舗装道路に出てジグザグに降りていき、人民政府管轄の植林地区を通る。ケーブルは鉞石籠を吊るしたまま動いていない。

13 時 15 分、蒙自への道をとる。単線の線路を越えて、高速道路に入る。町に入ってラーメンの美味しい店に行ったが、閉まっており、過橋米線の店「王妃菊花過橋米線」に入る。具を 2 段構えで持ってきた。薄切り鶏肉、刻みキャベツ、葱、菊の花弁などが小皿に入っていて、油の浮いた熱々のスープに具を肉類から入れ、最後に麺を入れて食べる。(写真.過橋米線)

この町は 750 年の歴史があり、雲南省初めての税関がある。柘榴が名物だった。

14 時 45 分、天源大酒店(TianyuanHotel)に着く。15 分後、バスで紅河州博物館に行く。

ここは 2005 年に開館、車椅子で見学できるようにラセン式に通路ができていた。馬が大きな石輪を動かして粉を挽いている様子を実物の大きさと展示している。学芸員の女性が案内していたが、教授が見えたせいか李主任が代わる。テーマを過去、現在、未来に分けていて、3 万 5 千年前の象牙化石のほか、河口の孤山洞、蒙自の馬鹿洞を説明していく。清朝時代の麻薬収納具は権力者が管理していたようだ。袁嘉谷 (1872~1937 年) は雲南唯一の科挙試験トップ合格者だった。女性 7 人が説明の仕方を学ぶため、我々に同行していた。

2006 年に国宝となった蒸気機関車が展示されていた。(写真館.「滇越鉄道蒸気機関車」)今は幅 1 m の狭軌で昆明、ハノイ間を運航している。紅河州は人口 410 万。哈尼族は 70 万人いるが 20 の支系があり、彝族は 90 万人いるが 10 の支系がある。哈尼族は独特の宇宙観を持ち、魚から蛙そして人間に進化したと考えている。それを表した銀製の装飾品が展示されていた。学芸員が彝族の装飾を頭に被った写真があった。彝族の衣装は満族の影響を受けていた。どのように伝わったのか興味がわく。館内にも軍事基地から戦闘機が離陸する音が聞こえていてベトナムとの国境に近いことがわかる。

清の時代、過橋米線料理の由来となった場所、南湖に寄っていく。湖の中央に伝統建築が見えた。(写真館.「南湖」)

17 時 15 分、ホテルに戻る。

18 時 30 分、歩いて 10 分の哈尼料理店「衆和酒店」に行く。(写真館.「哈尼料理」)

何れもさっぱりした味だった。ビールに続いて白酒「青酒」を飲む。食後、団長、K氏と教授達で近くの按摩店に行く。2 階に行き、ソファーに座ってお湯と香料粉末の入った容器に足を浸ける。強めか弱めかを聞かれ、強めを頼む。彼女は壮族、隣の団長は哈尼族、K氏は漢族の女性だった。何とか耐えられる強さでマッサージを受ける。90 分、身体全体がほぐされた。

11月8日(土) 蒙自→新街鎮

朝 16°C 湿度 60% 快晴

6時30分、起床。両足に赤い斑点が出ていた。楊家に泊まった時に虫にやられたと思っただが、シュラフカバーの中で寝たし不可解だった。取りあえずレスタミン軟膏を塗っておく。このアレルギー症状は団長にも現われていた。

8時、別棟のレストランで過橋米線を食べる。ここのはドンブリが小さく、具も少なかった。食後、部屋に戻って荷物をロビーに下ろす。

9時、バスが出て直ぐ、市場を見つけ、曹君たちは柘榴を買っていた。高速道路はジグザグに高度を上げていく。

10時20分、保和を通過。ぐっと高度を下げ700m台になる。30分後、ガソリンスタンドで休憩。橋の先に温泉の看板が出ていた。バスの中で柘榴と大きな蜜柑が配布される。蔡が言っていたように上下に激しく揺れる。元陽の古い町、南沙鎮から新しい町、新街鎮まで山を越えていく。教授曰く、南シナ海からの水蒸気が山に当たって棚田を潤し、山を越えると湿気がなくなり、陸稲になる。

12時20分、新街鎮の雲梯大飯店(YunTi Hotel)に着く(写真館。「新街鎮」「雲梯大飯店」)。荷物を部屋に置いてロビーに集まり、別棟のレストランへ行って鱸と野菜料理、紫色の芋スープ、スズメ蜂のような虫の唐揚げを食べる。こここの哈尼料理は辛かった。

14時10分、出発。高度1,560mから200m上がり、箐口の見晴らしの良いところで写真を撮る(写真館。「箐口の棚田」)。村の上は森林で、雨が降ると家畜の糞が水田に流れて肥料になる。哈尼族は焼畑だったところを棚田にし、人口が増えると共に棚田を下へ下へと造っていた。真中に池を造り、魚養殖と灌漑に使う。途中、道路整備を女性がやっていたが、農作業も男女共にやっている。今は専ら畦壁の修理をしていた。水田にはタニシや稲に巻きつく桃色卵を見つける。

見晴台には水田の象徴として魚、水牛、タニシ、蛙の石像が並んでいた。アヒルも重要な役割を果たしているのにも思った(写真館。「見晴台」)。

舗装道路を降りていくと新築祝いをやっていた。16人の女性が彝族の衣装を着て音楽に合わせて踊っている。(写真館。「新築祝いの踊り」) 既婚者はお尻に2枚羽がついていた。

建物を見学させてもらう。3階建てで20人の家族が住む。近くの鉞山で金、銀を採掘して稼いだ金で建てたという。教授が祖母さんに祝金50元渡すと、ご機嫌になり、お祝いの餅米ケーキをいただく。入口では、訪問客の名前を書いて米と卵を入れた袋を渡していた。

17時、教授を先頭に彝族の村を歩く。小学校の校庭では、児童がバスケットをして遊んでいた。夕焼けの棚田撮影に向かう途中、団長がバスの中で休んでいることに気づく。Sさんはカメラのバッテリーが切れていた。曹君が携帯で蔡に連絡し、団長を起こしてバッテリーを持ってきてもらうことにする。

やや降りていくと棚田の撮影ポイント孟品に出る。小母さんがサクラ、サクラと言いながら、看板を見せて撮影料5元を要求していた。カメラを向けると嫌がる。教授は地元の人ではないし、言うなりになると、次はもっとふっかけて来るといふ。中国人カメラマン

達は、やりあった末、脇道を降りて三脚を据えていた。

18時過ぎ、畦壁に夕陽があたり出し、水田が光ってくる。壮大な自然美と大地の彫刻美だった。次々に撮って20分後に帰る。(写真館、「元陽棚田」)

19時45分、集合。哈尼料理店「六軍酒家」に行き、燕京ビールと瓶出しの白酒を飲みながら食べる。蔡が豆に酒をかけ、ライターで火をつけ、焦げ目がついたところで食べる。かつては各民族で地酒を造っていたが、ビールが入ってから段々と造らなくなっていた。

食後、歩いてホテルに帰る。各町に見かける「一心堂」は薬局チェーン店だった。ベッドに電気毛布があり、暖かくして寝る。

11月9日(日) 新街鎮→開遠(KaiYuan)

13℃ 湿度68% 晴

6時過ぎ、起床。朝焼けの景色を撮りに屋上に出る。刻一刻と変化し、街の建物も明るくなってきた。反対側にソーラーシステムが装備されていた。

8時前、ロビーに行くと、パリから来た団体に会う。昆明から貸し切りバスで来ていた。別棟に行き、ビュッフェで朝食をとる。サンドウィッチは殆どなくなっていた。

9時10分、出発。9分後、バスを降りて棚田の写真を撮る。やがてパリグループのバスも近くに停まる。未舗装の道路の溝工事を男女がやっていた。哈尼族女性の衣装は足元だけ刺繍している。

9時45分、全福庄村を歩く。かつてのシンボルだった茸型の屋根は極僅かしか残っていない。教授が訪ねた家の主人は不在だった。ここには竜谷大学の先生が滞在して調査していた。2階で木綿の機織りを実演してくれた。(写真館、「機織り」)

階下で藍の葉を持ち出して藍染めの仕方の説明を受ける。水の中に1週間入れておくと糸が染められ、何回も繰り返して浸けていく。6人家族の家に友人の女性が手伝いに来ていた。奥さんに1日の生活振りを聞く。

「6時に起きると、豚に餌をあげる。朝食の準備をし、食べたら農作業に出る。主人も用事がない限り一緒に行く。昼食は早めにとり、再び仕事、夕食は午後6時から1時間。食後はテレビを観る。大体10時までには寝る。息子は9歳、小学3年生。2000年に生まれたので慮千喜という名前をつけた。」

2人の女性が50キロはある材木の束を、棕櫚で編んだ背負い子しゅうろに乗せ、額に紐をまわして担いで行く。(写真館、「材木運び」) 慮千喜君と一緒に歩いて行く。棚田の端を歩き、灌漑水道に沿って歩く。棚田では農夫が水牛を使って耕していた。(写真館、「棚田風景」)

ようやく彼女達が材木を運ぶ理由が見えた。橋造りだった。川の間を既に男が3人して3本の角材を使って渡していた。(写真館、「橋架設」) 芝生が生えた広場に彼らの昼食(お粥)が置いてあった。我々は慮千喜君を先頭にして別のところから川を渡って進み、水車小屋のある集落に向かう。高度が下がると棚田の横幅が広がっていた。

12時10分、休憩所でチャーリッヒから来たカップルに会う。水車小屋の中を見て降りていくと箒口民俗村に出る。丸めた牛糞を壁に張り付けて乾燥させ、燃料にしていた。(写真

館。「牛糞燃料」) ブラジルと中国協賛で設立された小学校を通ると広場に出た。ここには文化陳列館と、雲南大学とカナダが協賛して作った研究所があった。正門の女性係員が入場料を払えとばかりに我々が雲南大学教授に文句を言っていたが、取り合わなかった。坂を登っていくと、ニコン高級カメラを持つ小母さん達が棚田の写真を撮っている。北京から来ていた。

その先に「新街鎮一多依村」と書いたバスが停まっていた。脇を通り過ぎようとしたら運転手が「乗っていけ」という合図をする。お誘いに甘えて乗り込む。箐口民俗村の門を過ぎたところに我々のバスが停まっていた。

13 時、出発。新街鎮に戻り、山城大酒店近くの店「包老六飯店」で雪花ビールを飲みながら哈尼料理を食べる。食後、広場のトイレに行くと 5 角請求される。広場では「蚕糸による絹製品」と謳った布団うたの販売をしていた。曹君曰く

「これは全部ニセモノでっせ」

「そうだろうが見本は本物じゃないの」

14 時 45 分、予定より 15 分遅れて出発。この街にも狗料理店があった。蔡の申し出により蒙自に戻るのではなく、より丘北に近い開遠で泊まることになった。1 時間後、紅河を渡ったところで写真を撮る。(写真館。「紅河」) 赤土によって赤茶けた河がとうとうと流れていた。近くのガソリンスタンドで休憩。河に沿って走ること 35 分、山に入る前の果物市場でバナナを 1 枝 (4 房付き) 15 円で購入、皆で食べる。

17 時 20 分、個旧市で 105 リットル給油する。1 リットル 5.9 元していた。開遠市に入るとモスクや学校が目立つ。(写真館。「モスLEM 学校」) この回族は団結力があり、麻薬取引で財力をつけ、メッカに巡礼し聖水を持ってくる。学校ではアラビア文字や先端技術を教えているという。

18 時 30 分、曹君が警官から滇南大酒店 (DianNan Hotel) を教えてもらう。行ってみると結婚式の披露宴が終った直後で大混雑だった。しばらく待ってからバスを横付けする。

19 時 35 分、火鍋料理を食べにタクシーに分乗していく。5 分後、着いたところは「重慶曾胖子」。結構込んでいた。鍋のあるテーブルにつき、素材を自分で持ってきて辛口スープと普通のスープに入れて食べる。野菜、豆腐の他、烏賊、鶏肉、何でも入れ、ビール、白酒を飲みながら食べる。辛いスープの前だったのでむせてしまう。適宜スープが補充され、最後は麺を入れて食べる。食後、若手と一緒にホテルに帰り、他の団員はタクシーで街外れの足マッサージ屋「御足堂」に行く。

718 号室に入り、シャワーを浴びて洗濯、垂れ等で汚れたズボンも洗う。洗面器に入れてゴシゴシ洗っていたら、突然、がらがらっと下に崩れ落ちて四散してしまう。良く見ると接着剤がまばらに塗ってあった。責任を問われた場合の対応に思いをめぐらす。こうした時の賠償保険に必要なので現場写真を撮っておく。22 時を過ぎていたので明朝、曹君に連絡することにして寝る。

11月10日(月) 開遠→丘北

晴

7時10分、携帯で曹君に連絡、昨晚の顛末を話して部屋にきてもらう。彼がやって来て、直ぐホテルの担当に連絡、女性がかけてつけて状況を見る。「怪我はありませんでしたか」と聞かれて「ない」と答える。曹君に「精神的なショックに対して責任者からの詫び状を書いてもらえば結構」と伝える。洗面用に別の部屋を案内されたが、シャワールームで済ませていた。4つ星ホテルとしてそれなりの対応をしていた。

8時、朝食を済ませて部屋に戻り、荷物を部屋から降ろす。チェックアウト前にマネージャーらしき女性が詫び状を封筒に入れて持ってきたので受け取る。バスの中で宋さんに要約してもらうと

「事故がありましてお客様に大変ご迷惑をおかけしましたこととお詫び申し上げます。2度とこのようなことを起こさないように致します。この件により洗面器接着に問題があることがわかりました。また、これを教訓としてより良いサービスを目指しますので、又のお越しをお待ち申し上げます」(写真館、「詫び状」)。

9時、副団長の希望にそって滇越鉄道の開遠駅に向かう。場所は直ぐだった。その前に鉄道開設当時のフランス式建築物を見る。2階建てのシンプルなものだった。隣の広場でゲートボールをやっていた。通りには新幹線計画らしき看板が屋根の上にあった。教授が駅員に事情を言って特別に構内に入れてもらった。今は専ら貨物列車が多いという。(写真館、「開遠駅」)

9時35分、出発。アラビア文字が店に書いてあり、ヒジャーブと呼ばれるスカーフを被った女性が歩いていた。郊外に出るとサトウキビ、果樹畑と水田が続き、ユーカリの木を目にする。1時間後、山間に入り、トンネルを幾つか越える。石灰岩による独特の山容が見えた。(写真館、「開遠→炭房」) 松の木がとところどころに生えているだけで森林はない。

炭房ICで降りて丘北一文山間のバスを追い抜く。樹齢100年以上の並木が続く。ぶどう畑があった。民家の壁に赤唐辛子を乾しているのが目立つ。

天星郷村の市場には、トラックで運ばれた赤唐辛子の袋詰めが山積みされて、人で込み合っていた。ここの赤唐辛子は海外にも輸出されているという。他に衣類や果物を売っていた。民家の壁は、泥に稲藁を混ぜて型に入れて造ったレンガ状の土の塊を積み上げて造られている。

12時50分、彝族の支族サニ族学会長チョーユニア、壮族の副学会長李才さんがバスに乗り込み、5分後、バスを降りて老人クラブの門を通る。「敬老之徳碑」が立っていた。応接室に案内され、チョーさんから説明を受ける。

「唐時代、丘北県は噴古と呼ばれていた。ここには隠居者が住む。改革開放前、この町は麻薬、ヤクザ、鉄砲が多かった。今は唐辛子の名産地として知られている。日本からの援助でソーラーシステムを導入、観光に力をそそいでいる。鉄や金の埋蔵にも注目している」(写真館、「チョー・サニ族会長」)。

応接室には壁一杯に行事や訪問者、共産党要人などの写真が飾ってある。若き鄧小平の

もあった。

13 時 30 分、瑞和大酒店で大きな川魚の甘煮や地元の野菜料理を食べる。チョーさんは 68 歳、「若者は彝語を書けない」と嘆いていた。壮族は北東から移住、壮語は漢語とミックスしているという。

14 時 45 分、出発。断層帯を見ながら走っていくと地形が変わる。煙突のある工場はレンガを造っていた。30 分後、白臉山村でバスが停まり、広場に行く。羅さんが村の服屋へ案内、彝族衣装の刺繍付き白いチョッキをいただき、早速着て広場に戻る。

教授の挨拶に続き、団長が日本語で挨拶、宋さんが通訳する（写真館、「団長挨拶」）。それに応じて若者の女性リーダーが挨拶して 7 人の 14~15 歳の少女が草笛踊りを始める。次に 8 人の少年が 3 弦楽器を肩にかけて踊り、更に男女が楽器を持ちながら掛け声をかけて踊る。踊りは未熟だが、愛嬌でカバーしていた。女性の頭に被った大きな蝶結びは動物崇拝の象徴。昔は木と虫の形をしていた。肩から斜めに垂らしている帯の先に蛇の頭をあしらっていた（写真館、「若手彝族の踊り」）。

16 時 10 分、広場を出てバスに乗り、仙人洞村宿舎「荷花農家楽」に行く。宿舎は村の中心にあり、手前に口を開けた虎の石像が立っていた（写真館、「虎像」）。彝族は虎を崇拝している。糸瓜^{へちま}が垂れた入口を通り、部屋に入って荷物を整理、デジカメのバッテリーを充電しておく。

18 時、中庭に集合。歩いてレストラン「清荷院」に行く。蒸したサツマイモを食べていると、黄紹忠仙人洞村前村長と範成明村長がやって来た。5 人の彝族の歌い手が白酒を持って歓迎の歌を歌う。「酒が好きでも嫌いでも飲まなければならない」という意味の歌だった。迫力ある歌の後、乾杯が続く。煙草と同じく、自分が飲みたくなったら相手にまず酒を注いで杯を交わす。酔わないように料理もしっかり食べる。黄さんといい、範さんも歌が上手い。黄さんは村 1 番の金持ちで 22 年村長を務めていた。若手 3 人も歌い、我々も次々と歌う。O さんは中国の歌のほか、ドイツ語で歌う。山の歌、炭坑節と続き、私は団長と鳩ポッポの歌で役目を果たす。最後に教授と前村長がサニ族の恋の歌を歌う。教授は朗々と歌っていた。

場所を変えて踊りを見学する。沖縄と同じ蛇皮三味線の演奏に合わせて中年の小母さんが竹道具を持って踊り、男 3 人が竹製の仕掛け道具を持って魚捕りを踊る（写真館、「魚捕り踊り」）。終って記念写真を撮って別れると、別れの歌を歌って見送られる。次の家の庭では色模様のエプロンをつけた中年小母さんが白い布を使って踊る。更に訪ねたところでは平均 70 歳のお婆さんグループが鎌や棒を持って踊っていた（写真館、「ベテラン彝族の演舞」）。

村民は昼間働き、夜になると自分達の文化の伝承に努めていた。彼らは 13 歳になると「情人」の部屋に入る。男は小さな部屋を建てて一緒に過ごす。10 人位と付き合い、子どもが出来ると大人しくなる。老人カップル 2 組の踊りは、或る日偶然、山で再会したときの踊りで、男が女を抱き上げていた。ここにもオペラがあった。

宿泊先に戻ると少年少女組が待っていた。一通り踊った後、我々の踊りを見たいと言われ、Sさんが振り鉢巻きをしてエイヤトット節を踊る。

22時20分、解散。部屋のシャワーの先はとれていて使い物にならない。窓から葛が入り込んでいた。湯船がないのに泡立て液が用意されていた。ベッド脇の電気は点くが、部屋のライトは電線むき出しで壊れたままだった。

11月11日（火） 仙人洞村

11℃ 湿度82% 晴

7時15分、村内放送と音楽が流れる。中庭にいる団体客が騒がしかった。

8時30分、階下でお粥に辛みそを入れて食べる。それに蓮の粉を溶いたトロミのある甘いスープ、ゆで卵、最後に炒飯が出た。

外に出ると葬式に出くわす。シンバルや笛、太鼓で村内を巡っていた。村人が米などを持って葬式を出した家に行く。近くの家屋上に「九重葛民宿」と書いた看板を掲げていた。ここにも民宿がある。

9時10分、壮族の村へ出発。街道に出る左手角の畑を埋めたてていた。5ツ星のホテルを建てるといふ。村民達は我々のバスに書いてある「雲南大学」を珍しそうに見ていた。

25分後、丘北市内に戻り、昨日訪ねた老人クラブで壮族学会長王兆権達を乗せて錦屏鎮碧松驚村に向う。松とユーカリの並木道に人、牛車、バス、オートバイが通っていた。

10時5分、碧松驚村に着いた（写真館「碧松驚村」）。3階建ての小学校に入る。寄宿制で校舎の3階に2段ベッドがあり、1階の教室では20人足らずの生徒が授業を受けていた。2年生で、数学と書いた教科書を使っていた。

校庭を通過し、村民委員会集会所に案内され、応接室で村の上部組織の張徳華・錦屏鎮長と元村長、村長に挨拶する。帽子を被った元村長・王正選さんが横笛を吹いて歓迎し、若手の村長がメモを見ながら村について案内する。

「村は町まで10km、標高1,480m、平均気温は16度、13の集落があり人口は4,998人で壮族3,998人、苗族615人、彝族76人、漢族（漢族の人数は聞きもらしたが逆算すると229人となる）で年平均収入は980元。主食は米、トウモロコシ、小麦でタバコ、唐辛子、野菜、落花生、三七等を栽培している」

続いて元村長が補足説明する。

「改革・解放後は生活が向上した。共産党政策を村人に普及させた。壮族は文字を持たないが、伝統文化の踊りと道具、仮面劇を大切にしていきたい。元旦には松の木を取って籠に入れて床に置く。大晦日には、石とタニシを持ち帰る」

1階に降りて、横笛と2弦楽器の演奏を聞く。

大きな農家に行くと、土間で男女が交代で餅つきをしていた（写真館「餅つき」）。杵で餅をつき箆の上で蘇子（紫蘇）の粉を入れて丸める。ちぎったものを食べてみる。軟らかい。2階では機織りをしていた。

村を出て、湧き水を堰きとめたところに行く。食用草が浮いていた。近くに江西州に流れる川を利用した発電所があった。壮族衣装で着飾った大勢の小母さん達と壮族楽器を奏

でる小父さん達が我々について廻る。土壁のある民家の中を歩いて学校に戻る。

12時過ぎ、校庭でバンジョーのような楽器と横笛演奏に合わせて小母さん8人が踊りを披露する。女医と娘は銀製の飾りを付けた正装をしていた。帽子を被り正装した男が小ぶりの2本の竹製笛を吹く(写真館。「竹笛演奏」)。次に30人余りの女性が揃って踊る。共産党賞賛の踊りだった(写真館。「壮族歓迎団」)。

記念撮影後、先程の農家に戻る。庭には猪八戒の持つ武器に似たものやヌンチャクと仮面が置かれていた。昔、お年寄りが亡くなった時、山に埋葬するが、虎に食べられないようにするための物だった(写真館。「埋葬具」)。

13時過ぎ、昼食をとる。入口付近で解体していた魚や鶏が料理されて卓上に並び、白酒で歓迎されながら食べる。黄色と紫色の米も出た。食後も歌と共に小母さんから差し出される茶碗の白酒を何回にも渡って飲まされる。校庭で見かけていた最も貫禄のある女性が音頭をとっていた。歌の意味は「遠いところから来たお客さん、私達は何もないけれどもどうぞ寛いでください」。歌垣の一種で、本来なら我々がお返しの歌を歌うべきなのだろうが、酩酊状態で気がつかなかった。バケツ一杯に入っていた白酒がなくなったところで放免される(写真館。「歌垣」)。

庭先で筆自慢の鎮長が「海上生明月、天涯共此時」と揮毫し、張徳華と名前を書く。「一緒に良い時間を過ごしました」という意味らしい。求めに応じて団長は「中日友好」と揮毫。咄嗟のことで「永遠」を入れるのを忘れたというのが、流石だった。学校の通り道で縄跳びをやっていて張氏が飛び入り参加する。

14時50分、村を辞去、石畳の道を通り、20分後、舗装道路を走る。

16時、仙人洞村の宿舎に戻り、今度は歩いていく。船着場から鉄製の小舟3艘に分乗して長さ21キロの仙人洞湖に漕ぎ出る。長さ7.1mの舟に6人。救命胴衣もないので危なかった。少年が静かにオールで漕いでいく。ペットボトルを半分に切ったものがあつたので捨てようとしたが、舟に溜まった水を出す物だった(写真館。「仙人洞湖①」「②」)。

この地帯、7千年前は海で海洋生物が石灰岩になった。地殻変動で隆起してカルスト地形になる。地質上、水は溜まらないが、ここでは46の浅い湖になる。野生の蓮と水草が生え、平均水深は3m、最深でも30mという。13種の稀少魚と、小海老がいる。ここの蓮は夏になると、白く、縁が赤い花が咲く。100年前、猿が生息していたが、ベトナム戦争時、政府が殺してしまったという。

石灰岩の70~80m程の小山が林立する特異な景観を見せていた。83の鍾乳洞があり、一番大きな鍾乳洞は長さ15kmある。一帯の名前は普者黒。普者黒とは彝族の言葉と思われるプチョへ(海老や魚の捕れる所)を漢字の似た音に当てたものという。

無事、湖上遊覧から帰ったが、船着場でK氏が足を滑らして水に浸かり、全身びしょ濡れとなってしまう。

18時35分、宿の中庭で夕食をとる。湖でとれたワカサギのような魚や小海老の揚げ物、蓮の茎料理などを食べる。食後、再び歌唱大会。テレサ・テンやモンゴル、チベットの歌

が出、三高の歌、吉田山、そしてSさんがカラオケ用歌唱集を持ってきて歌う。教授は回族の歌で女性を想う歌を歌う。

適当なところで外に出て、歌の聞こえる方に行くと、広場で踊っていた。青年男女の踊りが続いたあと、Sさんがハチマキ姿になりローンを借りて船頭の歌を歌いながら漕ぐ。中日交流が進んでいた（写真館、「船頭踊り」）。

11月12日（水） 仙人洞村→弥勒 12℃ 晴

7時、テレビの全国天気予報によると昆明の天気は晴、気温は5～20℃だった。

8時20分、麵を食べる。K氏の衣類が全てきれいになって戻ってきた。

9時、羅さんを先頭に村を歩く。屋根の上にある瓢箪の形は、妊婦を表し、瓢箪の根はたくさんあるので多産であること、枝が長いので家系が続くことを意味していた。

村の入口の奥に広場があり、彝語、漢語、英語で「彝族文化生態村」と書かれた縦型の看板とトーテムが立つ。奥に、日本とは異なる連軸型の竹が茂っていた。彝族に次の竹物語が伝わっている（写真館、「彝族文化生態村広場」）。

神さまが「油の雨が降るので竹の中に逃げなさい」と村民に伝えたところ、一組の夫婦だけ言うことを聞いた。その後、数日間、油雨が降り、畑に出ていた村民は火に焼かれてしまい、2人だけ生き残った。以来、祖先の命を救った竹を崇拝している。

何やらノアの箱舟に似ていた。

羅さんを先頭に「神の山」に登る。女人禁制で、酒で酔っ払ったり、年内に引き起こした間違いの厄払いのため登っていた。貴重品が落ちていても誰も拾わないという。途中の道は登りやすくしているが、聖なる山道なのにゴミが目立つ。

木の幹に巻かれた赤い布は、日本の山のルートにある識別テープと同じだった。70mほど登って頂上に着く。岩に囲まれた中央に太い木で出来たリングが立ち、後ろには「生命之？」と書かれていた（写真館、「神山山頂」）。千年以上前から男根崇拝が続いている。ここからの眺めには荒々しさがなかった。^{たお}嫺やかな風景に敬意を表して合掌してから降りる（写真館、「神山からの眺め」）。

下山後、彝族第1の神である虎の石像を中心に7つの石像が囲む広場を周る。その前に水の神を祀っており、池の中に石像が眠っていた。ここは、湖で魚がたくさん捕れること、舟の安全を祈るところだった。魚は女性の生殖器、鳥の頭は男性の生殖器を象徴しており、魚を捕ったあと、鳥に捧げるといふ。

水牛の形をした神像の前に立つ。ここで新年にご馳走を捧げる。次に、火の神像、耕作の神像と続き、中央に虎の神が立つ。虎の皮は田、血は川、油は雨、骨は山を意味し、彝族の精神を表していた。虎神の奥に天の神像が立つ。右目が太陽（男）、左目が月（女）の形をしていた（写真館、「天の神像」）。次の土の神像は蛇が頭にトグロを巻いていて額に道案内の標識を彫っていた。疫病の神像は皮膚病になった顔だった。最後に虫の神像が立つ。野菜の虫は蝶が食べてくれる。いわば生態循環を示している。

これらの石像は教授の友人の美術家が村民に描いてもらったイメージを肉付けし、民間

の石工が彫ったもので、今後、50年、100年経てば歴史的遺産になるという。

蔡は近くで釣りをしていたが成果はなかった。前の村長が経営する民宿の食堂で蓮や湖の魚の料理を食べる。

12時15分、弥勒に向けて出発する。車中でK氏が昨日、湖に浸かった件を禊としてとらえ無事、神の山に登ることが出来たことについて話す。途中、牛の競り市をやっていた。305号線を西にとり高度を上げていく。ジャガイモやトウモロコシ畑が続いていたのが荒地になる。坂道では次々と公共バスを抜いていく。

高度計が2,070mを示し、「加水」と書いたところで停まり、エンジンを冷やす。峠を越えて、赤く濁った南盤江を渡る。中国で4番目に長い河の上流だった。再び山中に入っていく。川に近いところに焼畑が続き、崖に白いペンキで「保護森林緑化祖国」と大書していた。

15時、教授はバスを停めて外に出て話す。

「20年前までミャンマー国境近くの焼畑を調査していたが、今は殆ど残っていない。2年前から、この一帯を調査している」と言いつつ奥を指し、「政府方針は森林を保護しているので、奥地で焼畑をした後は2~3年間、休閑地になっている。森林が再生しやすく伐採し、植物を燃やして灰の形で土地に栄養分を与えていくのだが、土地が痩せているので苗族、^{やお}瑤族は貧しい」という。眼下のトウモロコシ畑で男が働いていた（写真館。「焼畑、頂上奥に苗族」）。

バスに乗って走って行くとブドウ畑が見えた。反対の車線にパトカーを先頭に軍人を乗せたトラックが25台通過する。やがて弥勒市に入る。街の外れに開発された生態公園の中に4階建てのホテルが4棟、離れて建っていた。

16時 5分、湖泉酒店(Huquan Hotel)D棟に着く。煙草会社「紅河卷烟歴」の経営で財をなし、県政府からの委託を受けて投資建設したものだった。国内で1番有名な中学校も創立している。広大な池は人造だった。教授の教え子がここの設計に関わっていて、500元の宿賃が半額になった。

16時45分、海水パンツを履き、部屋にある白いガウンを着て山上に設けられた露天風呂「山頂泡池」に行き、中に入る（写真館。「露天風呂」）。しばらく浸かったあと、他の湯探検に行く。しかしどこの湯も温くて入れない。結局、元に戻って暖まって帰る。

18時40分、バスに乗ってホテルの別館「水雲間」へ食べに行く。弥勒料理の間は混んでおり雲南料理店の間で食べる。金星ビールの後、赤ワイン「雲南紅」の2006年ものを飲む。ボージョレ・ヌボーのように若かった。教授は一通り少数民族を案内し、専門の焼畑についても話したせいか、今までのキャリアを話す。祖父は周恩来の顧問。1913年9月、日本に亡命して早大で政治経済を学んでいる。祖母の兄は李根源（1879~1965）。騰越出身で日本に軍事留学、雲南軍政部長を務めている。教授は文化大革命では1960年から10年間、自動車工場で働いていた。

1989年、京大の佐々木高明氏と雲南調査。

1990年、雲南大学社会科学院と京大東南アジア研究センター（古川彰、高谷好一、山田勇）が共同研究した時に参加。

1993年、京大東南アジア研究センター客員教授。

1995年、東外大アジア・アフリカ研究センター客員教授。

日本の学者は中国の理解が深く、信頼関係が続くが、アメリカの研究者はドライで、その後、音沙汰がない。来年は雲南大学で人類学会を主宰する。秋道智彌さんや田中耕司さんも来るという。

20時30分、帰館。角部屋のM氏の部屋で、残っている酒を飲み、ツマミを食べ、四方山話をする。

11月13日（木）弥勒→石林→昆明 **朝：15℃ 湿度 75% 曇のち晴**

8時、集合後、レストランで食事。

9時15分、ホテル発。釣りをしている人が池辺に並んでいる。高速道路を走っていくと、右手の山頂に布袋さまのような金色の大仏が見え、そこへの参道が続いていた。

10時過ぎ、石灰岩が点々と見えてくる。松しか生えていない。料金所を通過する。

10時45分、石林着。観光バスが駐車場を埋め尽くしていた。バスを降りると日本語ガイドがつかまとう。入場料大人140元のところ70歳以上無料、60歳以上割引との掲示があったが、外国人には適用されなかった。教授は観光局長に連絡したが不在だったので交渉を諦める。教授と葵は参加せず、広大な園内を電動カート（200元）で移動する。ここは約2億8千万年前に海底だったところに石灰岩が隆起して出来たカルスト地形で、海水や雨水による溶解、風化作用を繰り返して、約200万年前に現在の石峰ができた（写真館。「石峰」）。豚、象、亀に似た形や戦争に行った夫の帰りを待つ夫人像を見つける（写真館。「夫人像」）。平日だというのに、主要なスポットは観光客で一杯だった。中国人の団体は同じ帽子を被っていた。サニ族の衣装を着た女性が写真のモデルになっていた（写真館。「サニ族」）。

良く写真に出て来る風景に出る。「石林」と書いた書家は龍雲だった（写真館。「石林」）。「ここで西遊記の撮影が行なわれた」と宋さんが言う。1833年の地震で崩壊した跡を通り、望峰に登って写真を撮る（写真館。「望峰で」）。

偶然、広場で宋さんの英語教師徐蔚先生に会う。生徒を連れて課外授業をしていた。しばし英語で話して別れる。

13時30分、正門近くの店「彝家縁風味餐厅」に入って、野菜中心の11品とスープを、ビールを飲みながら食べる。飼葉桶のような入れ物に入ったご飯も食べる。

14時15分、石林出発。昆石高速道に出て昆明に向かう。1時間後、ミネラルウォーター「雲南山泉」の工場が右手に見えた。昆明市に入り監獄の前を通る。古いアパートを解体していた。

16時5分、教授と羅さんは科学院の前で降りていく。土産にもらった赤唐辛子3袋をバスの荷物入れから出していた。10分後、雲大ホテルに着く。

18時、ロビーに集合。大学の正門を通り、大学の敷地にある翠雲楼の2階に行く。ドラ

フトビールと白酒「酔明月」を飲みながらトウモロコシ入りスープや炒飯を食べる。食後、タクシーで昆明会堂に行く。

19時35分、観劇料220元払って会堂に入る。踊り子2人がいて、写真を一緒に撮ってくれた。ガイド資格の宋さんは、我々の端の空席に座れた。

20時、雲南映象という舞踏団のショーが始まる。創世記からジノー族、哈尼族の入れ墨姿、神との交流をドラムで表現する。左端の案内板でテーマを英字で表示していた。雨乞いや日食のシーンも良く表現し、満月を背景に踊る女体の影の妖しさも秀逸。イ泰族、彝族の踊りは舞台一杯に動いていた。中国映画に通ずる団の迫力を感じる。

21時40分、終演。タクシー3台に分かれて帰る。明日の午前中は自由行動にした。

11月14日(金) 昆明

晴

8時30分、朝食は1人で食べる。団員たちは、大学近くの昆明動物園に出かけて行く。市民は無料らしく大勢の老人男女が気功、踊り、マージャン、トランプ、楽器演奏などを楽しんでいた、白虎を見たという。その後、圓通寺を参観して来た。

11時過ぎ、曹君が部屋にやってきた。今までの経費を総括する。宿泊先の村には謝礼として500~700元払っていた。途中、携帯で教授にも確認してみる。私が計算したものと殆ど一致していた。通訳費用、晚餐会費など残りの支払いに必要な金額を洗い出す。

12時、ロビー集合。ホテル裏の別館「銀杏苑」で昼食。今度は他にヤキソバを注文する。食後、ホテルから歩いて大通りに出て、宋さんが通う雲南師範大学の前を通り、両替のため中国銀行に行く。円を元に替えて曹君に払い、残金を団員に返すことにする。

市バスに乗る。料金は1元だった。昆明のバス交通はドイツ人が関与したという。博物館の近くで降りる。

14時25分、雲南省博物館に入り、セキュリティのゲートを通って行く(写真館。「雲南省博物館」)。2階から見学、まず壁画を見る。牧童が牛達を扱っていた。史記に書いてあり、石塞山遺跡で発見された金製印は複製だった。発掘したときの状況を復元している。博物館の前に建っていた彫像の本物があつた。水牛を後ろから襲っている虎で、牛の背中に物を置けるようになっている(写真館。「牛虎銅案」)。

大理国時代の小さな観音像の他、文殊菩薩、普賢菩薩や、南証国第5代国王の時に唐と戦って勝った記念像を展示していた。明時代の韋駄天立像は木製に金箔を貼り付けている(写真館。「韋駄天立像」)。1時間ちょっとではとても足りない。人骨2つを使った鼓を最後にして出る。総じて複製品が多かったが、佐倉の国立歴史民俗博物館もそうだったことを思い出す。

15時40分、大通りを歩いて15分後、新華書店に入り、時間を決めて解散する。一般書店なので少数民族に関する専門書はない。結局、地図とVIDEOCD雲南民歌を買っただけだった。

再び街を歩く。広場の地面に100年前の昆明の地図が書かれていた。高層ビル建築中の脇を2階建てバスが走っていた。珠寶花鳥市場を散策する。鳥、亀や兎など何でも売って

いた。

ホテル経由組と夕食会場直行組に別れてタクシーでチベット料理店「瑪吉阿米」に行く。私はホテルに戻って、謝礼金やお土産をピックアップしてから行く。

18時過ぎ、全員揃ったところで2階に上がり、教授が席をアサインする。スタッフから、客である団員にチベットスタイルの長い白ショールを首からかけてもらう。スタッフは音楽を演奏しながら他のテーブルの客にもかけていく。

ビールで乾杯した後、団長、副団長そして私が挨拶。団長から教授に謝礼金と羊羹と資生堂製品を渡し、煙草を吸う羅さんにはセブンスター・1カートン差し上げる。張氏、曹君には羊羹、宋さんには資生堂製品を渡す。後はビールと白酒を飲みながら食べる。教授に昨晚のショーのことを話したら、彝族の踊りは祖先のものを現代化したもので、出演者は各少数民族から選ばれていた。

19時前、一段落したところで、教授が返礼の挨拶をする。

「この旅は、東京の研究室に副団長とA先生が訪ねて来られて打ち合わせをしてから始まりました。お二人の努力に感謝します。私達もこのようなことは経験がないので気づかなかったこと、足りないこともあったかと思えます。何より皆さんが元気で帰って来られたことに感心しました。これからも中国にいらして下さい」

教授は我々に彝族手織りの肩掛けバックと四季の普者黒を放映したDVDを渡す。その後、全員が挨拶する。宋さんは「皆さんから日本語、日本文化についてたくさん教えていただきました。又、年配の方なのに勉強しようとする姿勢に感心しました」という。曹君、張氏は、こうした機会を与えてくださった教授に感謝していることに触れていた(写真館「晩餐会」)。

19時35分、チベット人のショーが始まる。男性4人の弦楽器を演奏しながらの踊り、長身の歌手の歌、3人娘の踊りと続く。男性歌手に女性客が白ショールをかけていた。宋さんに私のショールを渡すと宋さんも男性歌手にかけた。後半、チベット民族衣装のファッションショーになり、華やかな衣装を着たスタッフが通路を周ってから舞台上がる(写真館「民族衣装ショー」)。お気に入りの人と撮れるというので、宋さんや張氏が選んだ人との写真を撮ったが、曹君は恥かしがって断わる。宴は終わった。

東京の研究室で教授夫人に会ったことがあるので、「奥様よろしく」と言って教授と握手し、タクシーで帰る。

11月15日(土) 昆明→北京→成田

晴

5時、モーニングコールで起きる。荷物を持って下に降りると副団長が送りに来ていた。彼は午後出発の便でバンコクに向かう。

6時に出発したが、大学の門が開いていないので、別の門に行って大通りに出る。今までは最後列に座っていたが、空港まで最前列に座って宋さんや曹君と話す。彼女から「いつタイに戻るのですか」と聞かれる。私が毎冬、タイの僻地教育に関わっていることを覚えていて、私にとってタイが第2の故郷ということを知っていたので、私にわかっていての言い方まで知っていた。

曹君には、「I have a dream.」と言い、2年後、博士課程に進んだ折りには調査研究に同行したいと告げる。

6時50分、昆明空港に着く。蔡運転手に日本煙草一ケース渡して別れる。CAのチェックインカウンターでは2列に分かれ、早く手続きが出来たところで済ます。空港税は既に組み込まれていた。曹君、宋さんと別れ、待合室で英語版雲南ガイドブックを買っておく。

8時5分、CA4171便は定刻にドアを閉めて出発。10分後離陸。機中で軽食。朝なのに燕京ビールが飲めた。

11時5分、北京空港着。気温20℃、晴れていた。25分後、荷物をピックアップ。4階に上がり、国際線のFカウンターでCA167便の手続きをする。そこで解散。4人で上の階にあるタイ料理店に行ってビールを飲みながら海老入りヤキソバを食べる。1時間前に出たが、セキュリティに時間がかかり、更に国際線ターミナル移動と飛行機までのバス移動に時間がかかり、機内に入ったのは搭乗開始時刻を過ぎていた。

14時40分、ゲートを離れ27分後、離陸。(写真館。「北京空港離陸」)。

15時20分、ベルトサインが消える。天津の埋め立て計画が着々と進行していた。赤ワインを飲みながら豚肉料理を食べる。中国歴史活劇が放映されていたが、チャンネルは中国語だけだった。食後、一休みする。

17時20分(日本時間)、下界は既に明かりを灯していた。

18時22分、成田国際空港着。荷物をピックアップして皆に挨拶してから、先に税関を通過する。ターミナルの端に行って携帯電話を返却。序でに荷物を託送してから京成電鉄に乗って帰る。

完

(前田栄三 編集)